物語を利用した指導（テキストを使った指導の続き）

第五冊から第十冊までは、物語です。物語の扱い方について、お話ししたいと思います。

いずれも、初めて見る漢字が、かなり多く使われていますので、子供たちに、独力でこれを読むことを期待しても、それは無理です。

初めは、お話を聞かせるような調子で、これらの物語を読んで聞かせます。この時、子供たちに、字をたどらせたいと思って、ゆっくりと読んでやりがちですが、これはいけません。

あとでその理由を申し上げますが、お話を聞く場合でも、文章を読む場合でも、全体の意味を正しくとらえるために適当な速度というものがあるのです。むしろ、遅すぎるよりは、速すぎるくらいのほうがわかり良いものでして、一般に、ゆっくり話したり、ゆっくり読んだほうがわかり良い、と考えられているのは間違いです。

したがって、最初は、子供たちに文字をたどらせることなど考えないで、普通、お話をする時の速さ以上に遅くしないで、すらすらと読んでいくようにします。

お話を聞く場合でも、物語を読む場合でも、同じものを繰り返すことの楽しみと、新しいものを聞く（読む）楽しみとあります。

子供でもおとなでもそうですが、たいていどちらの楽しみをももっています。物語を知りつくしていて、ここはこう、あそこはどう、安心して知りつくした道を散歩するような楽しみに似ています。

それと反対に、未知の土地を旅する時のように物語がどうなるだろうかと、心をおどらせながら聞く（読む）楽しみがあります。

幼児には、とりわけ、同じものを繰り巡すことを楽しむ性質が強くあります。繰り返すことによって、それを身につけ、自分のものにして成長するためにそれは必要な性質です。だから幼児にとりわけ強く備わっ

幼児には同じことを繰り返すことを楽しむ性質が強い

ているのでしょう。

この絵本の物語は、繰り返し読んで聞かせて、幼児がそらで言えるまでにしてやりたいと思います。それには`一節一節、復唱させるようなやり方で、読ませるのもよいと思います。

幼児は、文字が読めなくても、おとなのまねをして、本を読むまねをしたがるものです。だから、先生のあとをついて復唱することは、やさしくできて、しかも結構幼児に満足できることです。

物語が暗誦できるようになりますと、言葉と文字とを対応させて、どの字は何という字かを考えるようになり、目立った漢字からだんだんと覚えていきます。

物語に出てくる漢字は、取り立てて教えてやらなくても、長い間には、前後の関係から判断して読み、読んで覚えるものですから、取り立てて教える必要はありません。

また、知らない漢字を、前後の関係から判断して読むことは、思考力を伸ばし、頭の働きを良くする働きがありますので、教える代わりに質問して考えさせましょう。